

貴家 映子 | 三重県立美術館学芸員

〈当時の「clas」の雰囲気やスタッフの心意気などはいかがだったでしょうか〉

●最初の頃は、茂登山先生の研究室に在籍していて、「clas」のスタッフとしても先に経験を積んでいたHさんの事務処理スピードが速くて、圧倒されていたのが印象深いです。自分は「clas」の運営のお手伝いを精一杯しているつもりでしたが、今思えば、かなりの世間知らず。色々な手続きや連絡など手間取ることも多く、そんな学生に任せるところは任せながら指導もしつつ運営を続けていくのは、実は先生にも色々と気苦労があったらうな、と今となっては思います。

人に見てもらおうということ、外部の人と協働することなど、ただ学生をしているだけでは遭遇しない場面で、それまでは意識したこともなかった色々な気構えや礼儀などを学びました。

〈ご自身は、どのような経緯でスタッフに応募されましたか〉

●立ち上げの時のメンバーに研究室の先輩だったMさんがいて、それを引き継いだSさんの修士論文が忙しくなる頃に、修士課程1年だった私が交代でスタッフになりました。美術史学研究室在籍の学生からもスタッフがいるという状態が続くように、という意図があったと思います。

〈担当した企画、あるいは印象的な展示などのエピソードはございますか〉

●「セシル・マサール」展は、一貫した表現を続ける、海外のアーティストと関わった貴重な機会でした。展示作業をお手伝いして、授業の通訳もさせてもらいました。今もウェブサイトアーカイブしてもらっているテキストは、授業のレポート以外で現代アートについて初めて作文をした機会だったかも、と思うと気恥ずかしいような、感慨深いような気がします。

「イメージの悲しみ」展のレセプションでは、地元の日本酒を探してきて熱燗にして、おでんを沢山煮て・・・準備中は「何やってるんだろう」と頭をよぎった気もしますが、最後は皆さんが楽しそうで、嬉しく、シンポジウムなど一連のイベントの締めくくりの高揚感があったのを覚えています。

〈大学内での「clas」の存在、今後のあり方や期待についてどのようにお考えでしょうか〉

●「clas」スタッフを辞めた後、博士課程2年の時に、後輩達にも手伝ってもらい、片山一葉さんと一緒に展覧会をキュレーションし、片山さん、文谷有佳里さんに展示やワークショップをしてもらいました。

アーティストが空間に合わせてアイデアを出し、それを形にする現場に立ち会ったり、その人の表現に即したワークショップを考え、実現させたり・・・一連の過程は刺激的で、創造の面白さや難しさをダイレクトに味わうことができました。

学生主導で企画してもいいし、ゲストキュレーターを呼んでもいいと思います。学生スタッフがアーティストと共同で一つの展示やイベントを作り上げる企画は、年に一度くらいあっても良いのでは、と思ったりします。

〈学芸員をおつとめのいま、スタッフが運営に携わる役割をどのようにお考えでしょうか〉

●先生や専任のキュレーターだけで運営をしていたら、一般の学生にとっては、近寄りやすい空間、無関係な場所になっていくのではないのでしょうか。スタッフは、アートやヴィジュアルカルチャーと名古屋大学の学生たちとの橋渡し役だと思います。

スタッフを務める学生にとっての意義という点では、一つは、人脈ができることでしょうか。「clas」を通じて出来た人脈が、美術館の仕事でもじわじわと、折に触れて役に立っており、とてもありがたいと思っています。また、美術館においても、展覧会というのは沢山の雑用の積み重ねで実現するのですが、それについては、「clas」やトリエンナーレでの体験を通して、少くくは心の準備ができていたかな、と思います。



『Between Past and Future 「clas」10周年記念アーカイブ展』より
「clas」スタッフOB/OGへのインタビュー